

植物の花期を基調にした厚内の季節

和歌山 満

1. はじめに

自然の草花を楽しむというが、人々は日常どんな場所で、どの様な植物を、いかなる季節に目にするのであろうか。きっとごく身近にある花色鮮やかな植物に出会った時に違いない。そして素直な気持で美しいと感じ、つい飾ってみたくなる種類ならば申し分ないと思われる。

筆者は、予てから写真に撮り続けて来た野の花を、郷土の自然を知つていただく一助として披露する機会を得た。1991年8月17日から一週間、浦幌町厚内公民館にて開催した「野の花」写真展がそれであった。

桜草の王者クリンソウ、原生花園の象徴花ハマナスをはじめ、早春のエゾエンゴサクから初秋の花エゾトリカブトまで、42種類をカラー写真で御覧いただいた。

花写真を前に、中部山岳地帯の高山植物と東北海道（道東）沿岸種との類似性を来館者と語ることができ、関心の高さを知つた思いである。

縁の存在が、食料や資源としてのみならず心の糧として貴重になりつつある現在、優美な野の花を日々眺めながら、自然保護を考えて行くことは、文化の継承ともいえる。

本稿では、道東沿岸に位置する厚内の野の花を紹介し、それらと季節との関連について述べてみる。ただし、選択した42種類の植物は、顕著な花をつけていることを第一条件として構成した為、およその傾向を理解するには有効と思われる。

2. 野の花と季節的自然

(1) 花の種類と特徴

厚内で見られ、展示の対象とした42種類の植物名、及び簡単な特徴を添えてTable 1及び2に示した。

(2) 植物の分布

Map 1は、記載種の番号を生育地に対応させ、地図上にプロットしたものである。

植物は、丘陵が迫る海岸線の狭い平地や路傍、川沿いの草地、山裾等に集中的に分布している。当地のもつ地形的限界を反映した結果で、大楽毛海岸草原（釧路）や小清水原生花園（網走）の様な、広い面積を持つ海岸砂丘草原を発達させる余地はない。従つて、Table 1.2に示した種でも明らかな様に、山地と海岸性の植物が混在した景観をつくることになる。

季節推移で詳しく辿つてみると、春は山裾の緩やかな斜面から平地にさしかかる一帯に咲く花が、夏になると海岸草原や多湿な平地等の開けた場所に進出、秋にいたっては、傾斜地や山河に開花する植物を目にすることが多い。つまり、この地の人々は、山縁から海岸縁に、そして山縁に戻るという経路で季節の花を堪能しているのである。

(3) 花の生育環境

Fig. 1は、主たる生態環境別に種類を分けて表したものである。

海岸の砂地を好む種類、砂地がマウンド化している一帯に多くの種類、山がちな地形や乾いた傾斜地に育つ種類、多湿化しつつある凹地、沢沿

目

次

植物の花期を基調にした厚内の季節	和歌山	満	2
続・浦幌ロマンの会の豎穴住居復元	後藤秀彦		12

写真説明：仙台藩トカチ陣屋跡 1859（安政6）年にトカチ場所を知行した仙台藩は広尾町円山の地に陣屋を設けたが、1968年に撤退、陣屋はその後トカチ会所を経て田安家の所有となった。

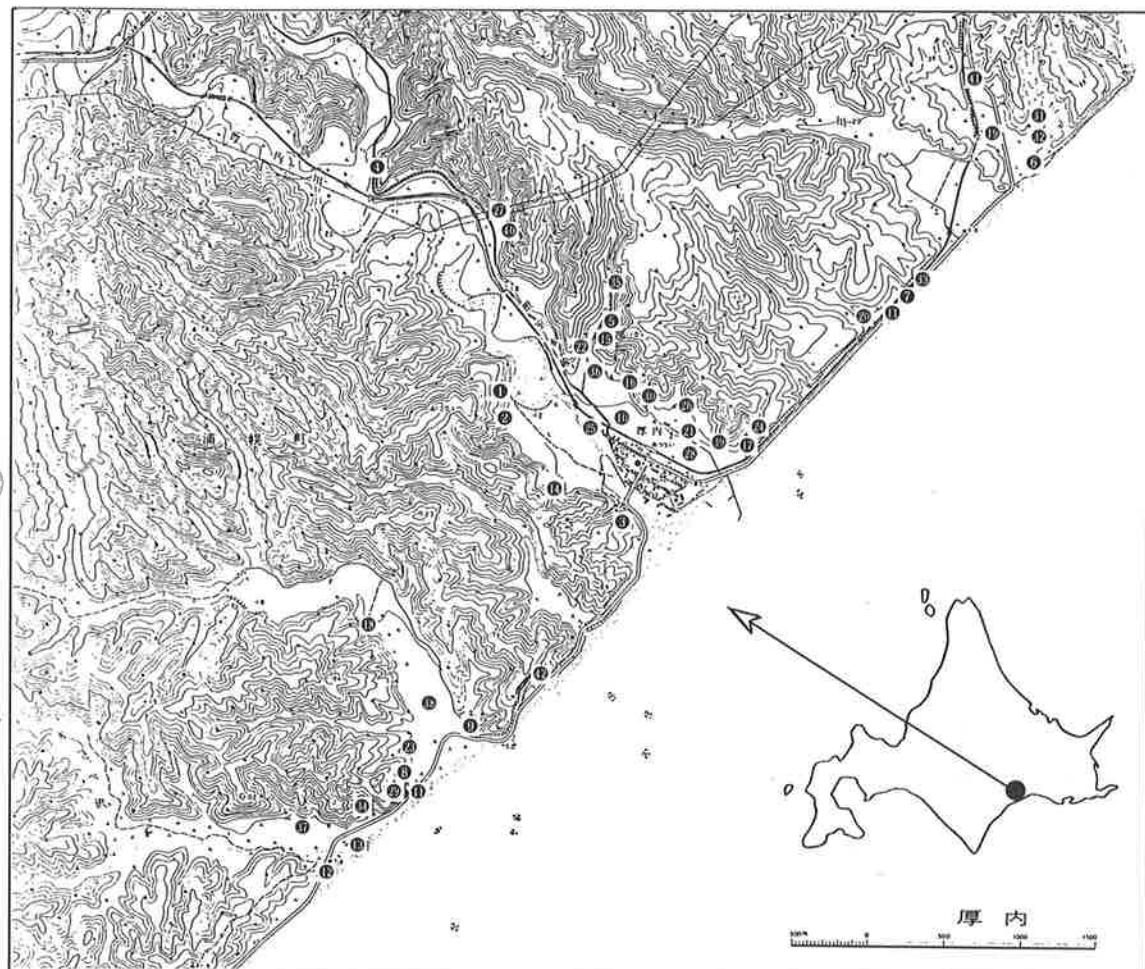
（後藤秀彦）

番号	植物名と特徴
①	<i>Adonis ramosa</i> フクジュソウ (キンポウゲ科) 日中咲く花びらは20~30枚、欧洲では赤花が普通。
②	<i>Anemone raddeana</i> アズマイチゲ (キンポウゲ科) Pl.1. ①花びらが退化、8~13枚の白いがく片が目立つ植物。
③	<i>Corydalis ambigua</i> エゾエンゴサク (ケシ科) Pl.1. ②花色は青、赤紫、白と多様で小葉も変化が多い。塊茎は球形。
④	<i>Primula jesana v. pubescens</i> エゾオオサクラソウ (サクラソウ科) 葉柄や花茎に軟毛を有する。道東を象徴する花で数も多い。
⑤	<i>Primula japonica</i> クリンソウ (サクラソウ科) Pl.1. ③花が茎の上部に3~7段の輪をつくる。日本産サクラソウ属で最大。
⑥	<i>Iris setosa</i> ヒオウギアヤメ (アヤメ科) アヤメと似るが内花被片が小形。葉が平たく扇形に並ぶ。
⑦	<i>Thermopsis tenuipetiolata</i> センダイハギ (マメ科) 花は蝶形で豆のサヤをつくるので科がわかる。海岸草原の代表種。
⑧	<i>Hemerocallis yezoensis</i> エゾキスゲ (ユリ科) 花は夕方から開き翌日の午前中にしぼむ。レモンイエローの花色。
⑨	<i>Lilium maculatum v. dauricum</i> エゾスカシユリ (ユリ科) 地下茎が横にはい所々に小鱗茎を有す。原生花園の代表種。
⑩	<i>Filipendula purpurea</i> エゾシモツケソウ (バラ科) 紅紫色の花弁は5個で美しい。栽培されることあり。
⑪	<i>Rosa rugosa</i> ハマナス (バラ科) 和名はハマナシの意味。全株鋭いトゲが密生する。
⑫	<i>Rosa rugosa</i> シロバナハマナス (バラ科) 白花のハマナスで数は少ない。⑪と同種だが色分けしている。
⑬	<i>Ixeris repens</i> ハマニガナ (キク科) 茎は砂中をはい葉だけを地上に出す。別名ハマイチヨウ。
⑭	<i>Spiranthes sinensis</i> ネジバナ (ラン科) 螺旋状に花がつき稀に白花あり。人里を嫌わない唯一のラン。
⑮	<i>Lilium medeoloides</i> クルマユリ (ユリ科) 花被片は巻き上り、1~3段の輪状葉あり。平地の高山性植物。
⑯	<i>Lysimachia clethroides</i> オカトラノオ (サクラソウ科) Pl.1. ④白花の穂が特に目立つ。和名は獸の尾に似た花の意味。
⑰	<i>Calystegia japonica</i> ヒルガオ (ヒルガオ科) 茎はツル性で花は結実しない。コヒルガオは花柄に翼がある。
⑱	<i>Epilobium angustifolium</i> ヤナギラン (アカバナ科) 花の終了後綿におおわれる。花がランに葉が柳に似る。
⑲	<i>Spiraea salicifolia</i> ホザキシモツケ (バラ科) 雄しべが花弁より著しく長い。高さ1m位の小低木である。
⑳	<i>Geranium yesoense</i> エゾフウロ (フウロソウ科) ゲンノショウコに似た葉のきれこみは深い。萼にも長い毛がある。
㉑	<i>Lactuca sibirica</i> エゾムラサキニガナ (キク科) 舌状花だけで頭花をつくる。茎は枝を出さない。

Table 1 花の種類 (I)

番号	植物名と特徴
㉒	<i>Adenophora triphylla v. japonica</i> ツリガネニンジン (キキョウ科) 雌しべの先が花の外にまでつき出る。花色は白、青、紫と変化あり。
㉓	<i>Iris ensata v. spontanea</i> ノハナショウブ (アヤメ科) Pl.1. ⑤外花被片が大きく、葉の中脈もはっきりする。酸性土を好む。
㉔	<i>Lysimachia vulgaris v. davurica</i> クサレダマ (サクラソウ科) 地下茎を引くが茎は直立する。レダマはマメ科の木本。
㉕	<i>Oenothera biennis</i> メマツヨイグサ (アカバナ科) 葉先がとがって赤味を帯びるが花は色変化ない。夕方から咲く。
㉖	<i>Hypericum ascyron</i> トモエソウ (オトギリソウ科) 巴形の花弁は左右不同。雄しべは5個の束になる。
㉗	<i>Sedum kamtschaticum</i> キリンソウ (ベンケイソウ科) 葉は多肉質。ドライフラワーにすると星形の花が美しい。
㉘	<i>Rudbeckia hirta</i> キヌガサギク (キク科) 舌状花 (8~14枚) と筒状花からなる。北アメリカ原産帰化植物
㉙	<i>Aruncus dioicus v. tenuifolius</i> ヤマブキショウマ (バラ科) Pl.1. ⑥山がちな草地に多い。3心皮は離生し、根茎は木化する。
㉚	<i>Hydrangea paniculata</i> ノリウツギ (ユキノシタ科) 白く目立つのは中性花 (飾り花) のがく片。別名サビタは有名。
㉛	<i>Hosta rectifolia</i> タチギボウシ (ユリ科) 花形が欄干の柱頭飾りに似る。花色に変化が多い。
㉜	<i>Lythrum salicaria</i> エゾミソハギ (ミソハギ科) 4稜を持つ茎は若い時サラダ、茶の代用。仏花にすることあり。
㉝	<i>Dianthus superbus</i> エゾカワラナデシコ (ナデシコ科) 濃い紅紫色の花弁の先は細切する。秋の七草の仲間。
㉞	<i>Lobelia sessilifolia</i> サワギキョウ (キキョウ科) 下から上に咲き上がる唇形の花は不整形。群生する。
㉟	<i>Aconitum yesoense</i> エゾトリカブト (キンポウゲ科) Pl.1. ⑦花の鳥帽子形が名の由来。根のアルカロイドは猛毒。
㉟	<i>Solidago virga-aurea v. asiatica</i> アキノキリンソウ (キク科) Pl.1. ⑧変種が多く小形のものをコガネギクと称す。北半球温帶に広く分布。
㉞	<i>Patrinia scabiosaeifolia</i> オミナエシ (オミナエシ科) 3~4mmの黄色小花が集合する。秋の七草のひとつ。
㉞	<i>Achillea ptarmica v. macrocephala</i> エゾノコギリソウ (キク科) 葉にノコギリ状の切れ込みがある。他にノコギリ、セイヨウノコギリソウあり。
㉞	<i>Achillea margaritacea</i> ヤマハハコ (キク科) Pl.1. ⑨茎はやや硬く灰白軟毛を密生させる。雌雄異株。
㉞	<i>Aster glehnii</i> エゾゴマナ (キク科) 白い頭花がすき間なくつく。北地に多く変種あり。
㉞	<i>Cimicifuga simplex</i> サラシナショウマ (キンポウゲ科) 長い穂状花序をつける。若い葉は食用になる。
㉞	<i>Silene alba</i> ヒロハノマンテマ (ナデシコ科) 先が2裂する5枚の花弁。別名マツヨイセンノウで夕方開花する。

Table 2 花の種類 (II)



Map 1 植物の分布

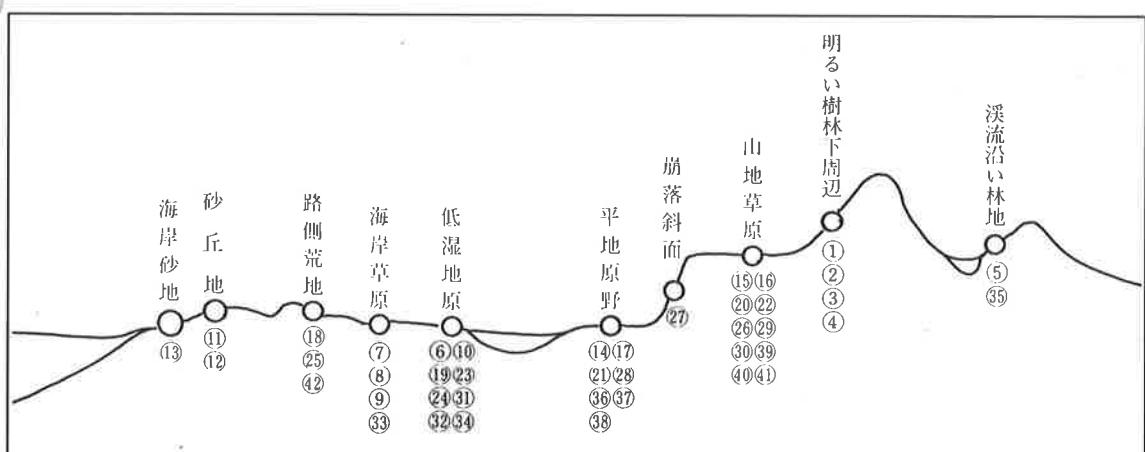


Fig. 1 生態的環境

科名	1	2	3	4	5	6	7	種類
キク科								7
バラ科								5
サクラソウ科								4
キンポウゲ科								3
ユリ科								3
アヤメ科								2
アカバナ科								2
ナデシコ科								2
キキョウ科								2
ユキノシタ科								1
ケシ・マメ・ラン・フウロソウ・ヒルガオ・ミソハギ・オミナエシ・オトギリソウ・ベンケイソウ								1

Fig. 2 科別種類数

いや林内、そして明るい草地や路傍に生きる植物等、実に多様である。すなわち、植物は生態環境の微妙な変化を捕え、それらの空間を埋め、分かち合うかの様に生息していると理解できる。

(4) 科レベルでの構成

42種類の植物を科別に分類した結果をFig. 2に示す。

キク科、バラ科、サクラソウ科、キンポウゲ科、ユリ科の順に占める度数が多い。しかしながら、一科あたりの種数の割合は、最大で約17%にすぎない。目につきやすい花をついている科といえども種類は少ないのである。この事実は、種のレベルというより科の段階で、科数を分散させるしくみが作用した多様化で、野の花達の共存を実現した結果と思われる。もちろん群落をつくる方式で個体数を誇る演出もあるが、科の存続という観点

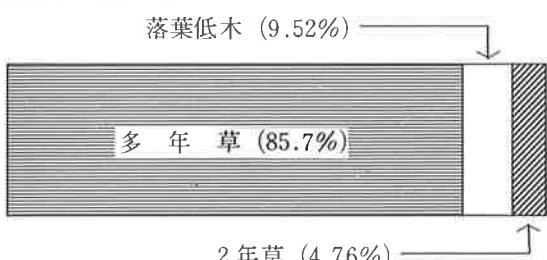


Fig. 3 生育期間による分類

黄色系(黄色やオレンジ)	白色系(白)
① ⑦ ⑧ ⑨ ⑬ ⑮	② ⑫ ⑯ ㉙ ㉚ ㉘
㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙	㉙ ㉚ ㉛ ㉜
㉗	30.9
	23.8
赤色系(赤・ピンク・赤紫)	青色系(青や青紫)
④ ⑤ ⑩ ⑪ ⑭ ⑯	③ ⑥ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔
㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜	㉔ ㉕
	26.1
	19.0

Table 3 種別花色の割合(単位%)

からは同意であろう。

(5) 植物の生育期間

生存する期間で植物を区別することが可能である。木本を除いた草本類を、一年草、二年草、多年草に分ける。Fig. 3 で明らかな様に一年草はなく、二年草にメマツヨイグサ、ヒロハノマンテマの2種が該当するだけで、残り36種は多年草が占めた。ちなみに落葉低木は、ノリウツギ、シロバナハマナス、ハマナス、ホザキシモッケの4種である。

花が目立ち、2年以上生育を繰り返す草本類が優勢な事実は、毎年同じ様な花景観を確実に楽しめることを可能にしている。

(6) 花(花被)の色

花の美しさを担う要素に色があげられるだろう。色の判定は、花の時期や生育条件の違いによって異なり、曖昧な点があるが、記載種を4色化して

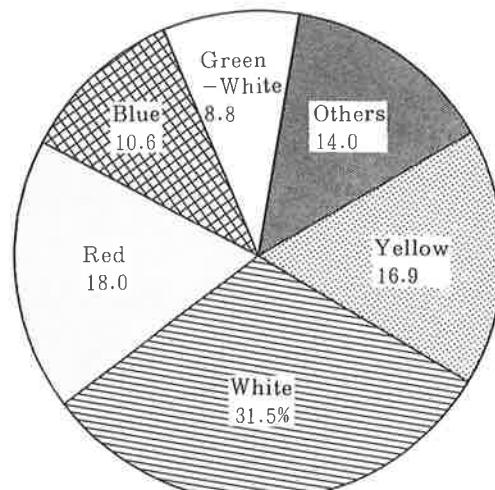


Fig. 4 北海道の花976種の花色

種類	月												記載番号										
	4 上	4 中	4 下	5 上	5 中	5 下	6 上	6 中	6 下	7 上	7 中	7 下	8 上	8 中	8 下	9 上	9 中	9 下	10 上	10 中	10 下		
フクジュソウ				○																			①
アズマイチゲ					○																		②
エゾエンゴサク					○																		③
エゾオオサクラソウ						○																	④
クリンソウ							○																⑤
ヒオウギアヤメ								○															⑥
センダイハイギ									○														⑦
エゾキスゲ										○													⑧
エゾスカシユリ											○												⑨
エゾシモツケソウ												○											⑩
ハマナス													○										⑪
レロバナハマナス														○									⑫
ハマニガナ															○								⑬
ネジバマ																○							⑭
クルマユリ																	○						⑮
オカトラノオ																		○					⑯
ヒルガオ																			○				⑰
ヤナギラン																			○				⑱
ホザキシモツケ																			○				⑲
エゾフウロ																			○				⑳
エゾムラサキニガナ																			○				㉑
ツリガネニンジン																			○				㉒
ノハナショウブ																			○				㉓
クサレダマ																			○				㉔
メマツヨイグサ																			○				㉕
トモエソウ																			○				㉖
キリンソウ																			○				㉗
キヌガサギク																			○				㉘
ヤマブキショウマ																			○				㉙
ノリウツギ																			○				㉚
タチギボウシ																			○				㉛
エゾミツハギ																			○				㉜
エゾカラナデシコ																			○				㉝
サワギキヨウ																			○				㉞
エゾトリカブト																			○				㉟
アキノキリンソウ																			○				㉟
オミナエシ																			○				㉟
エゾノコギリソウ																			○				㉟
ヤマハハコ																			○				㉟
エゾゴマナ																			○				㉟
サラシナショウマ																			○				㉟
ヒロハノマンテマ																			○				㉟
花期（重複）種数	1	3	4	5	4	3	5	8	11	17	24	28	33	31	19	10	6	1					

Table. 4 植物の花期

みた。

赤色系（赤やピンク、赤紫）、黄色系（黄やオレンジ）、青色系（青や青紫）、白色系に分類したのがTable 3である。黄色系の割合が高く、青色系がやや少なめになっているが、筆者の経験を基に総合判断すれば、当地では黄白色系の種類が三季を通して多いと推定できる。参考までに、辻井達一他（1991年）に記載されている976種で色比率を調べてみた結果をFig. 4に示しておく。

黄白色花の割合が高い一因に、科レベルでのキク科植物の種類の優勢が考えられる。筆者の例でも黄白系キク科の種類が共にトップを占めている。

(7) 開花期と植物季節

モンスーン帯に位置する日本は、四季の変化が明瞭といわれている。何を目安に季節を知り定めることができるのであろうか。体感的な判断である暑さ寒さ、つまり気温季節はその最もよい指標になる。だが視覚的作用も重要な要因と思われる。

代表的生物を指標にして季節を明らかにする方法に生物季節がある。植物季節、とりわけ顕花植物の開花日は、地域の季節を強く教示するに違いない。

Table 4は、厚内における42種の植物花期を暦上に表したものである。花の最盛期を花期の中点と仮定、各月ごとに花期と同じくする種類を数えて、季節とその幅を見積もり、当地の三季（春・夏・秋）を推定してみた。

野の花が教える春は、4月下旬から6月下旬まで、7月上旬から8月中旬までが夏、8月下旬から9月下旬までが秋となる。そして季節を象徴する代表種に、春はクリンソウ、夏はハマナス、秋はアキノキリンソウを指定するが、上述の仮定を根拠に、花期が比較的長いことを考慮している。しかしながら季節をはっきり区切ることのむずかしさを痛感した。今後より多種の開花期を精査し、統計的に検討する余地がある。

(8) 気温と花季節

気象データを基にした季節と花季節との関連を考察してみる。

Fig. 5は、過去10年間の月平均気温をグラフ化している。釧路から南西60kmの同じ海岸線に位置する厚内が、釧路に近似した気温変動を示すことは容易に認められる。厚内の気温を帶広と釧路の中間値と仮定して曲線を定めておく。

上述の花季節を基準に、月平均気温で三季を区分すると、5.5~14.0°Cが春、15.5~18.5°Cが夏、17.5~13.5°Cが秋の気温範囲になる。また例えば、物理的に月平均気温の山形グラフを、ピーク気温を含む夏、曲線の裾にあたる左右の気温をそれぞれ春、秋と仮定してみる。すると三季は、春(5.5~14.0°C、4月下旬~6月下旬)、夏(15.5~18.5°C、7月上旬~9月上旬)、秋(17.5~13.5°C、9月中旬から11月上旬)という対応を示す。この様な区分を花季節に照らし合わせるならば、長い春はうまく一致する。だが、気温中心の物理的季節では、夏が3ヶ月延長、その分秋の初めも遅れ、終了は2ヶ月もずれてしまい11月に入る。これでは長い夏、遅い秋で実際の植物景観と相容れず、体感的にも認めがたい。なぜなら8月下旬を境に急速に花数が減少しあじめる。9月に入ると枯れ草が目立ち、とても夏とは思えない。10月下旬には霜降が続き初冬そのものである。うまく期間の一致した春の場合は、低温傾向にもかかわらず、花数が増加している為、視覚的にも認め易い。花季節と気温による季節に差異が生じたのは、春と秋の気温幅を同一とみなして区分した為であった。よって花の季節の観点から判断するならば、夏と秋を短期に設定する方がよい様に思われる。

Fig. 6は、旬別平均気温で1年を細分化した釧路と札幌の例である。このデータで季節を定める

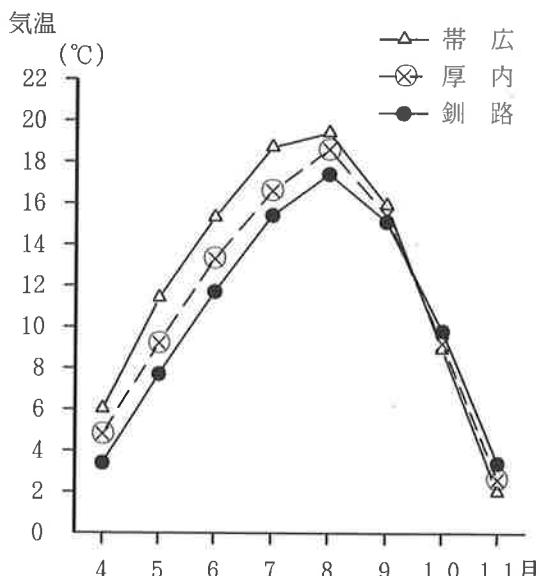


Fig. 5 月別平均気温

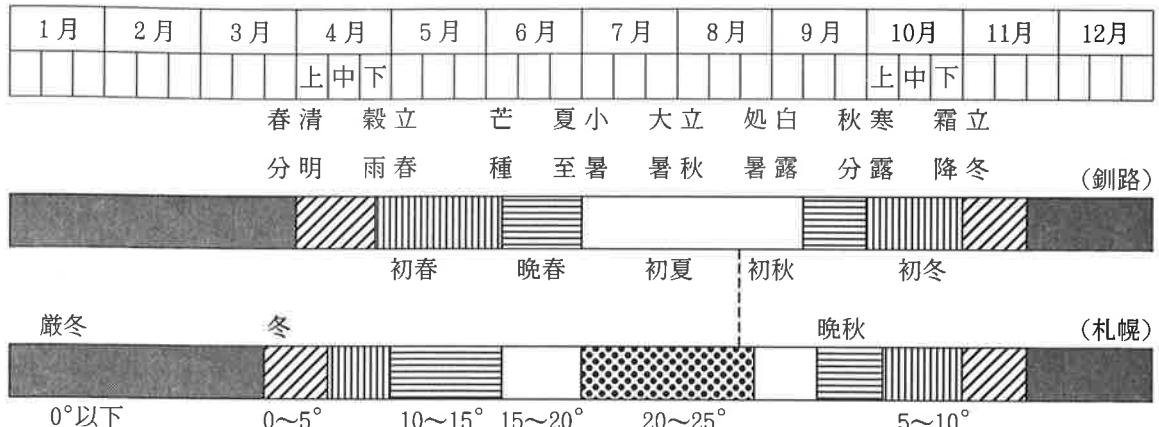


Fig. 6 旬 別 平 均 気 温

と、4月下旬（穀雨）から6月下旬（夏至）までが春、7月上旬（小暑）から9月上旬（白露）までが夏、9月中旬から9月下旬（秋分）までが秋となる。同様に花季節と比較してみると、春は全く同じ期間で問題はない。夏の長さは、釧路のデータが初秋を含んでいる為で、8月下旬初秋の札幌の例を適用すれば、つじつまが合う。非常に短い秋分までの秋も、上記理由から同一期間となる。

花季節を基準にすえた場合、当地の三季の特色として、月別平均気温と旬別気温を考慮する必要がある様に思われる。

(9) 季節の偏在について

春と秋で、なぜ季節幅の長短が顕著なのだろうか。気象データから、月平均気温の山形曲線の非対称に注目したい。8月中旬の最高気温に到達す

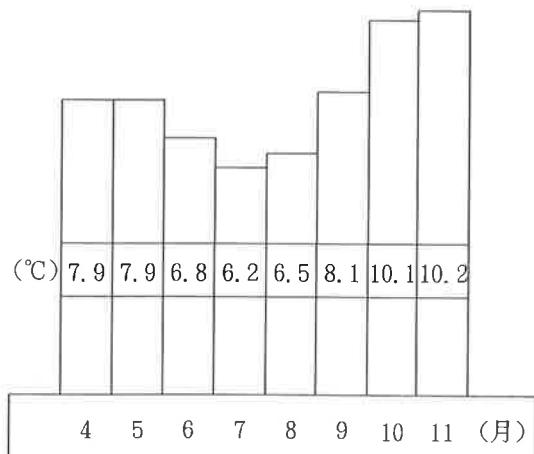


Fig. 7 月 別 平 年 値 日 較 差

るまでに3.5ヶ月を要し、緩慢な温度上昇である。それに対し、ピーク後の上昇温度幅と同量だけ下降するに要する日数は、半分以下の1.5ヶ月と急速である。長い春は、気温の穏やかな立ち上がりによるもので、比熱の大きい海水を持つ沿岸気候の特徴とも考えられる。他方短い秋は性急な気温落下で、比熱の小さい大地を有する内陸気候のパターンに近似している。しかしながらその原因は多分に気団の影響が強い結果と推測する。Fig. 7は月別日較差の違いを表しているが、このデータより明らかなる様に、春に比べ、8月からの3ヶ月間の差は2.1倍強で、暖寒の差が大きい日変化であ

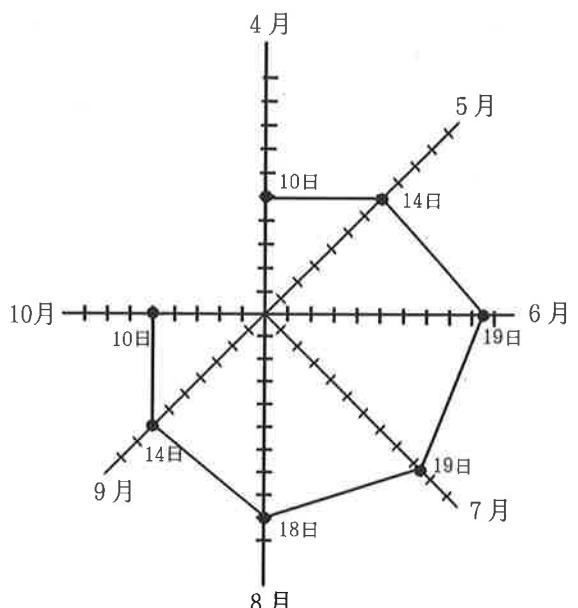


Fig. 8 月 別 霧 日 数

春



① アズマイチゲ



② エゾエンゴサク



③ クリンソウ

夏



④ オカトラノオ



⑤ ノハナショウブ



⑥ ヤマブキショウマ

秋



⑦ エゾトリカブト



⑧ アキノキリンソウ



⑨ ヤマハハコ

る。この様な気象的条件は、秋の植物数を制限する方向に作用していると思われる。

第2の要因として、道東沿岸に固有の現象である海霧（ガスと称している）をあげたい。Fig. 8は、過去10年間の月別平均霧日数を示している。5月から8月まで、月の半分から $\frac{2}{3}$ 以上も霧のかかる日があり、9月からようやく減少してゆく。

霧は日光を遮り気温を2度以上も下げるといわれている。この為当地では、気温上昇に長期間を要する長い春と、気温下降の速い秋が霧の盛衰と密接な関連を持つことになり、花の季節も自と規定されると理解できるであろう。

(10) 花色と季節の相関

花の色は、季節によって決まっているだろうか。結論するにはデータが少ないが、およその傾向はある様だ。

春の花は、黄、白、青、赤と色とりどりで、同じ割合である。経験的に述べるなら黄色系が目にとまり易い当地である。夏の花では白黄系がやや多くなり、秋の花になると青黄色に比べ、赤色系の減少が見られる。

(11) 三季の植物群

ここで、厚内の気候と季節花について一応のまとめをしよう。

当地では、長い春に続く夏との区別が、梅雨明けで区分できる本州と異なり不明瞭である。夏をつくる南の高気圧の北上が前線をおしあげ、結果として移流霧による霧日を多発させて気温の急上昇を抑止する。オホーツク高気圧の勢力が残る短夏も低温傾向から免れえない。8月中旬以降の気温下降は、霧の減少と晴天日の増加や移動性高気圧の影響を受けた日較差の大きい秋をつくり、内陸的気温低下を示すのも当地の特徴で、短期にならざるをえない事も指摘しておいた。

以上の様な緯度的気象条件の大地に花を咲かせている記載種を季節分けしてまとめとする。

○春の植物：フクジュソウ、アズマイチゲ、エゾエンゴサク、エゾオオサクラソウ、クリンソウ、ヒオウギアヤメ

○夏の植物：センダイハギ、エゾキスゲ、エゾスカシユリ、エゾシモツケソウ、ハマナス、シロバナハマナス、ハマニガナ、ネジバナ、クルマユリ、オカトラノオ、ヒルガオ、ヤナギラン、エゾフウロ、エゾムラサキニガナ、ノハナショウブ、

クサレダマ、メマツヨイグサ、トモエソウ、キリンソウ、ヤマブキショウマ、ノリウツギ、タチギボウシ

○秋の植物：サラシナショウマ、エゾゴマナ、ホザキシモツケ、ツリガネニンジン、キヌガサギク、エゾカワラナデシコ、サワギキヨウ、エゾトリカブト、アキノキリンソウ、オミナエシ、エゾノコギリソウ、ヤマハハコ、ヒロハノマンテマ

3. 終りに

毎年自分の季節になれば色とりどりの花をつけて咲き競う野の花は、自然環境を装飾する重要なメンバーである。この一見当前の様な現象に価値を認め、感謝する時代になりつつある現在は、人間活動に比例するかのごとく、本来生息していた植物を失いはじめた。反面いつしか外来の植物が侵入して勢力を拡大、植生を変化させている。

ヨーロッパやアメリカ原産の植物が土着すると帰化植物と呼ばれるが、都市とその周辺で著しい。本稿にて報告した植物中に、ヒロハノマンテマ（ヨーロッパ産）、メマツヨイグサ、キヌガサギク（北アメリカ産）の3種類が含まれている。帰化率の低さは、自然の指標であり、文化のパロメーターになるとすれば、当地は自然が残っている方に違いない。

季節の巡りを確認させてくれる野の花を眺めていると、自然が芸術家に思えてくるのは筆者だけであろうか。進化という造物主が完成をめざしている作品であるが故に、多様な形や色を呈する野の花は、実に美しい。

「自然は人間を必要としないが、人間は自然を必要とする」という名言がある。その人間は、年に約5万種の生物を絶やす営みを進行中らしい。北国の地に、「あの花の春」が巡り続けることを願うものである。

（千葉県松戸市立第一中学校教諭）

参考文献

旭川鉄道管理局（1975）さいはての花、鉄道弘済会北海道支部

釧路市青少年科学館（1983）釧路の科学

国土地理院（1986）2万5千分の1地形図「厚内」

佐竹義輔編（1967）野の花、講談社

鮫島惇一郎共著（1984）北海道森と林、北海道新聞社

田中瑞穂（1962）豊頃村大津の海岸草原群落をみて、No.129.釧路市立郷土博物館
 ————（1963）釧路の植物、釧路市
 ————（1980）こどものための東北海道の植物、釧路市

谷口弘一共著（1979）北海道植物教材図鑑、北海道新聞社

辻井達一共著（1991）北海道の花、北海道大学図書刊行会

東京天文台編纂（1989）理科年表、丸善株式会社

続・浦幌口マンの会の竪穴住居復元

後藤秀彦

筆者は本誌前号において「浦幌口マンの会の竪穴住居復元」と題して、1991年度における同会の縄文時代中期の竪穴住居復元の顛末を報告した（後藤、1992）。そもそもこの古代住居復元事業は、1991年度を初年度として、1992年度には縄文時代早期1棟、統縄文時代1棟、1993年度には擦文時代2棟などを復元しようとするもので、2年目の本年度は計画に従い縄文早期及び統縄文の住居各1棟を復元した。住居は縄文早期が浦幌町平和遺跡の第8号住居跡、統縄文時代が常呂町栄浦2遺跡の第9号住居跡をモデルとしたが、細部については省略したり付加したり、縮小したりして、独自に設計した。例えば、縄文早期の住居については柱の配列の歪みを正すとともに、柱配列の延長上に出入口を配置するなどの補正を行い、統縄文時代のものについては主柱の数を減らし、規則正しい配列としたなどである。

以上のような準備の後、必要な資材の調達や日程の調整を行い、実際に野外作業が開始されたのが7月5日、今年度分の作業終了が8月24日である。作業終了日には本別町から沢井トメノさんをお招きして、ウバユリの粥や澱粉かきの調理指導を受けるとともに、陶芸サークル「土の会」では縄文土器や統縄文土器の複製品を野焼きし、終了後、焼肉で完成を祝いあった。この試みは、この会の今後の体験学習の基本となるものである。

竪穴住居造作の最大の問題点は湿気のようである。特に、日常的に居住せず、火を焚ない本例のような場合、恒常に湿気が抜けず、床の湿気や柱のカビは避け切れない。これが、縄文時代のように日常的にそこに住み、火を焚くという環境であれば、内側からの湿気はある程度解決されるものと考えられるが、温暖多湿な日本の気候下では

外からの湿気はある程度慢性化していたことも考えられる。したがって、床面の水分を除去し、完全に踏み固められるようになるまでには相当の時間を要することが予測される。

また、竪穴掘削によって生じた土の処理の問題もある。これまでの発掘調査での知見などから屋根裾に盛り上げることは承知していたが昨年度も今年度も住居周辺に配土した。

直径5m、深さ50cmの竪穴の場合、
 $\pi \times (2.5)^2 \times 0.5 = 9.8125\text{m}^3$
 の土が排出されることになるが、この点については日本大学生産工学部教授山口廣氏から詳細なご教示をいただいた。

また、土器の作成を陶芸サークルに依頼した。土器は作成する住居の時代性に合わせ、それぞれの時代の土器を作ることとし、縄文早期が大楽毛式、縄文中期が北筒II式、統縄文期が後北C1式、擦文期が擦文式とした。これらはこれから順次作製の予定である。（浦幌町郷土博物館学芸員）

引用文献

後藤秀彦（1992）「浦幌口マンの会の竪穴復元」
 『浦幌町郷土博物館報告』39 浦幌

1992年10月20日	印刷
1992年10月30日	発行
編集者	後藤秀彦
発行責任者	石川安次
発行所	浦幌町郷土博物館 (089-56) 北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地の1
印刷所	大同出版紙業株式会社 (080) 北海道帯広市西7条南6丁目